

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 26 年 6 月 16 日現在

機関番号：32689

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2011～2013

課題番号：23520839

研究課題名(和文)『民族』時代における柳田民俗学の組織化に関する基礎的研究

研究課題名(英文)Organization of Yanagita Kunio's Folklore Studies in 1920s'

研究代表者

鶴見 太郎 (Tsurumi, Taro)

早稲田大学・文学学院・教授

研究者番号：80288696

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,700,000円、(間接経費) 1,110,000円

研究成果の概要(和文)：創刊当初より、雑誌『民族』には二つの編集方針が併存していた。前者は地道に各地の郷土研究者から採集報告を募る柳田国男、後者は欧米の文化人類学の成果を紹介する岡正雄ら若手研究者によって代表された。柳田にとって危惧されたのは、細かな郷土研究の成果が文化人類学と同一視され、民俗学の分野が侵食される可能性があることだった。この大正時代末に胚胎された問題は、戦後、民俗学は文化人類学の一部となることで活性化するという石田英一郎の提案で再燃する。

研究成果の概要(英文)：From its very beginnings, Minzoku has followed two policies in tandem, typified by two different scholars who were editors of the journal. Yanagita Kunio solicited fieldwork reports on localities by local history experts, while his successor, Oka Masao, introduced the findings of Western cultural anthropologists. Yanagita feared that the detailed findings of local historians would be seen as cultural anthropology and result in the field of folkloristics being encroached upon and eroded. This issue first arose at the end of Taisho era and was revived following the Second World War upon Ishida Eiichiro's proposal to breathe new life into folklorists by making it a part of cultural anthropology.

研究分野：史学

科研費の分科・細目：日本史

キーワード：郷土 柳田国男 『民族』 石田英一郎

## 1. 研究開始当初の背景

(1)この8年間、継続的に『民間伝承』、『旅と伝説』、『郷土研究』など、柳田国男が関わった、或いは執筆した雑誌を中心に、柳田によって試みられた郷土史家の組織化について検証を重ねてきた。その結果、次の3点が明らかとなった。

大正中期から既に少数ながら柳田の民俗学に読者として接していた郷土史家が継続的に柳田が関わった雑誌を購読していること。

信州松本(東筑摩郡)、鳥取、大阪など、柳田と特に信頼関係を結んだ郷土史家が居る地域にまず、凝集力の高い郷土研究会が生まれ、それが足場となって組織化がすすんでいること。

柳田民俗学が基調とした物証主義、生活から生まれる論理の尊重は、アジア・太平洋戦争下の日本の学界において経験的な思考を可能とする数少ない環境となったこと。

これらの事項をおさえた上で、大正末から昭和初年にかけて柳田によって編集された『民族』が柳田民俗学の形成過程で果たした役割について検討を加えた。

(2)研究史的に『民族』時代の柳田国男は、自らの民俗研究の方法を模索していたとされる。その中で次第に柳田は「心意伝承」を民俗学の支柱に据えることで自ら方法の輪郭を定めていく。その事例を提供する場として柳田が想定したのが郷土研究であった。しかしその過程で欧米の民族学によって日本の郷土を分析することについて、非常に慎重な態度がとられることとなった。

『民族』の時代とは、そうした柳田の内面における屈折を知る上で、ひとつの画期であるため、その基層をなす柳田の対民族学・文化人類学への対抗意識という問題についても絶えず注意をはらい、資料収集、分析をすすめた。

## 2. 研究の目的

以下の2点に重心をおいて研究をすすめた。

(1)『民族』とは、柳田国男と岡正雄というあきらかに異なる編集方針を持った人物によって運営された。前者は郷土史家を支持母体とし、その組織化を念頭に置き、後者は欧米文化人類学の研究成果を紹介して、日本におけるこの分野の開拓を志向した。双方に共通した課題と、軋轢を生んだ原因は何だったか。

(2)柳田民俗学の支持層は、『民族』の先行誌である『郷土研究』において散発的であるものの、地方において基盤を形成していたが、『民族』はそれらを継続的に吸収し得ていたのか。

上記(1)は昭和に入ってから、異民族と

の比較を抑え、「一国民俗学」を提唱する柳田の思想像を知る上で重要な事項であり、(2)は戦後に至るまで柳田民俗学の強固な支持母体となった郷土史家と、民俗語彙収集に特化する柳田の地道な方法に反発する主として東京在住の研究者グループとの相違を知る上で近代思想史上、重要な場面を提供する。

## 3. 研究の方法

(1)これまで行ってきた作業では、柳田国男が郷土史家に宛てた書簡並びにその返信、『民間伝承』編集長を長くつとめた橋浦泰雄に当てられた郷土史家からの書簡などを解読・分析することで、組織化の実態を検証してきた。今回の研究についても、『民族』バックナンバーに掲載された購読者を中心に、同様の形式を採用した。

(2)『民族』の購読者の動態を把握した上で、従前の研究においてすでにデータ・ベース化してある『郷土研究』、『民間伝承』の購読者リストと照合させ、三誌との間で購読者にどのような推移があるか、或いは継続性があるかを把握した。

(3)上記に加え、必要に応じて柳田が特に重点的に民俗学者の組織化を試みた地域(信州松本、大坂、京都、鳥取など)へ資料収集のため、数回の調査旅行を行った。その上で地元の側から得られた資料(柳田、橋浦の書簡など)を上記(1)における事例と照合させた。

(4)以上とは別に、柳田国男の民族学・文化人類学に対する理解を知る上で、1921年から23年にかけて柳田は国際連盟委任統治委員会委員として断続的にジュネーブに滞在し、その間、ヨーロッパ各地を廻って文化人類学の文献を渉猟、購入しているが、これら文化人類学への関心の高さと、学界面で見せた海外比較への抑制的な姿勢は、どのように説明付けられるのか、その点についても念頭に置いて、大正期から昭和初年にかけて柳田と交流した民族学者(渋沢敬三、岡正雄、松本信広、石田英一郎など)の著作の中から柳田関連の文献を検索して読解、検証した。

## 4. 研究成果

(1)『民族』の購読者については、数年間のブランクはあるものの、『郷土研究』時代における多くの読者が継続して『民族』を購読していることが判明した。ただし、前誌には少なかった層、すなわち社会学、民族学を専攻する少壮の学者が購読者として目立つことも新しい現象として加わっていることも確認した。

(2)その一方で、『民族』終刊後、岡正雄、折口信夫らによって創刊された『民俗学』は学上の対立から柳田が編集に加わっていないにもかかわらず、『民族』の購読者の多くが後継誌とみなしてこれに流入している

こと、さらに同誌の母体となった学会「民俗学会」にも多数の加入がみられることが分かった。

これらの購読者は概ね『民俗学』終刊後の1935年、新たに『民間伝承』が発刊された段階で「民間伝承の会」会員として登録を行うが、この段階で柳田民俗学は漸く固定された読者層を得たといえる。5.[図書]におけるは、この読者層を背景としながら行われた柳田の記念事業についてまとめたものである。

(3) 総じて『民族』の時代から柳田は、海外の民俗との比較についてこれを時期尚早とみなし、つとめて国内の郷土研究の充実をはかることが急務と考え、参加の弟子たちに対して、そのことを説いた。

こうした姿勢は同時に柳田にとって文化人類学がひとつの脅威となることにも繋がった。事実、柳田は日本の民俗事象が海外の類似した事例と比較されることについて、それはいずれも皮相のみを突き合わせているに止まるとして、強く批判した。言葉以前の「心意伝承」を重要な民俗研究の基底に据える柳田にとって、文化人類学との境界を明確にすることが眼前の課題であったが、それに対峙し得るだけの蓄積を民俗学の側はいまだ持っていないということが、当時の柳田の悩みでもあった。『民族』終刊後の学界対立は、そうした柳田の内面まで立ち入って考える必要がある。

その意味で、当該期にあつて岡正雄・折口信夫と柳田を和解させることに尽力した渋沢敬三の存在が極めて大きいことが当時の状況から分かる。

青年時代より欧米の民族学に目が開かれていながら、同時にそれらが植民地において発達したという事実を、ヨーロッパ駐在中、各地の博物館・美術館を廻ることで、認識した渋沢は、同時に日本の民具・漁業史の資料保管者に対して常に敬意をはらい続けるという独自の研究姿勢を当時から身に付けており、それはおのずから民族学と民俗学の双方を調停する上で有効に機能した。5.[図書]の は、渋沢敬三が祖父・栄一との身边に集積された資料を、同族会との話し合いからどのように編纂したかという問題を中心に、資料の管理者・使用者への配慮を重視するその取り組みの中で、渋沢敬三の民俗学における方法意識が形成されていることについて論じたものである。

(4) 戦後、石田英一郎は民俗学を文化人類学の一部門とする提案を柳田に行い、両者の間で長期の論争が行われ、最終的には石田の提案に民俗学の側から反駁できない弟子たちに落胆した柳田が自らが運営する民俗学研究所を閉鎖するという事態にまで発展するが、その遠因はこの当時から胚胎されていたといつてよい。

この経緯については、5.[図書]の でまず、石田英一郎の側に視点を置いて詳述し、

同じく5.[図書]の に所収の第7章「対峙する場 柳田国男と石田英一郎」では、柳田と石田との間で行われた対話に焦点を当てて考察した。

(5) これ以外に、大正末から昭和初期にかけて柳田が重点的に組織化を試みた地域の郷土史家と、当該地を訪れた民俗学者との間には、郷土の民俗を研究するにあたって、つとめて帰納的な手法を重視する柳田国男の姿勢を評価するという点で、政治的な立場を超えた強い信頼関係が成立していたことが分かった。

こうした現象は、1930年代に入って、柳田民俗学が同時代の戦時ナショナリズムを反映した日本研究から離れた経験的な思考環境を保持した、その助走ともいえる。5.[雑誌論文] は、その一事例として、五島列島(下五島)における郷土史家・久保清と橋浦泰雄との交流を1926年~27年当時の世相とともに、橋浦の日記から読み解いたものである。

#### 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

##### [雑誌論文](計 2 件)

鶴見太郎、橋浦泰雄「肥前五島遊記」、国立歴史民俗博物館研究報告第165集(日本における民俗研究の形成と発展に関する基礎研究)、査読有、2011年、317-337

鶴見太郎、対話する中野重治 柳田国男の影、三田文学、査読有、2014夏、2014、2-13

##### [学会発表](計 1 件)

鶴見太郎 パトロンとしての渋沢敬三、渋沢敬三記念国際シンポジウム「もうひとつの民間学 知識人・文化人としての渋沢敬三」、2013年9月7日、東京大学本郷キャンパス(福武ホール B2 福武ラーニングシアター)、主催・渋沢敬三記念事業実行委員会

##### [図書](計 4 件)

鶴見太郎、東京堂出版、ヨーゼフ・クライナー編『近代 日本意識 の成立 : 民俗学・民族学の貢献』所収「“モヤヒ”の風景 橋浦泰雄の組織論」、2012、183-195

鶴見太郎、東京堂出版、ヨーゼフ・クライナー編『近代 日本意識 の成立 : 民俗学・民族学の貢献』所収「隠れた体験の投影 石田英一郎の視点」、2012、336-359

鶴見太郎、新潮社、『座談の思想』、2013、総頁数319

鶴見太郎、法政大学出版局、高田知和・平井雄一郎編『記憶と歴史のなかの渋沢

栄一』所収「渋沢敬三による渋沢栄一の  
顕彰 - 方法的な側面から 』、2014、19-45

〔産業財産権〕

出願状況（計 0 件）

名称：  
発明者：  
権利者：  
種類：  
番号：  
出願年月日：  
国内外の別：

取得状況（計 0 件）

名称：  
発明者：  
権利者：  
種類：  
番号：  
取得年月日：  
国内外の別：

〔その他〕

ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究代表者

鶴見 太郎 (Tsurumi Taro)

研究者番号：80288696

(2) 研究分担者

( )

研究者番号：

(3) 連携研究者

( )

研究者番号：